サウンド・オブ・ホーム

叶野　遥

人物

六道映理(25)契約社員

大和田誠(6)

大和田誠(27)正社員

六道詠志(50)映理の父。会社員

六道志郎(17)映理の弟。高校生

六道理人(7)映理の弟。小学生

寺島唯(41)誠の上司。

幸田康夫(30)誠の同僚

夕子(26)女子社員

朝子(28)女子社員

高畠(67)大家

洋子(64)高畠の妻

○大和田家・ダイニング（朝）

パジャマ姿の大和田誠(9)が入ってくる。

テーブルの上にはコンビニの菓子パンがニ個と麦茶のパックが置いてある。

誠、テーブルの上を見つめる。

流しには食べ終わった食器が乱雑に積まれている。

誠、パンを食べ始める。

○六道家・全景（朝）

蝉が鳴いている。

住宅街の一軒家。

○同・寝室（朝）

目覚まし時計が鳴り響いている。

六道詠志（50）・六道志郎（17）・六道理人（7）が布団で並んで寝ている。

○同・六道映理の部屋（朝）

カーテンが引かれ薄暗い部屋。

六道映理（25）の手がベッドサイドの目覚まし時計のアラームを止める。
映理、カーテンを勢いよく開ける。
映理、部屋を出る。
映理の声「お父さん、志郎、理人！朝だよ起きて！」

○駅前・カフェ（朝）
優雅な音楽が流れる店内。
キーボードを素早い動きでタイピングする音。
大和田誠（27）が真剣な目でノートPCと向かい合っている。
コーヒーを口に含み、満足げに息を吐く。

○六道家・キッチン（朝）
映理が朝食を作っている。
映理の後ろを理人が走り抜ける。
理人「姉ちゃん、俺の体操服どこー？」

映理「洗濯して机の上に置いてあるよ」
映理の後ろを志郎が通り過ぎる。
志郎「姉ちゃん、今日俺弁当いらねぇ」
映理「ええ？もう作っちゃった」
志郎「バイト終わりに食うわ」
詠志が両手にネクタイを持って映理の
後ろに立つ。
詠志「映理、このスーツに合うのどっちかな」
映理「（チラッと見て）赤い方！」
詠志「ありがとう」
詠志、歩いていく。
映理、両手に皿を持って振り返る。
映理「朝ごはんできたよー！」
詠志・志郎・理人「はーい」
バタバタと集まっていく。
映理、皿を持って付いていく。

○駅前・カフェ（朝）
大和田、スコーンを食べながらＰＣを
操作する。

大和田「我ながら惚れ惚れする資料だな」
大和田、笑いを堪えきれず肩を揺らす。
カフェ店員が不審げに通り過ぎる。

○六道家・ダイニング（朝）
朝食を食べている映理・詠志・志郎・理人。
映理、腕時計を見る。
映理「え、もうこんな時間！私行かなきゃ」
映理、急いで食べる。
詠志「今日から新しい職場だったか」
映理「うん。ダイアホーム」
詠志「そうか。後のことはやっておくから」
映理「うん、ありがと。いってきます！」
詠志・志郎・理人「いってらっしゃい」
映理、鞄を掴んで部屋を出ていく。
詠志、映理の皿を片付け始める。

○駅前・ビジネス街（朝）
車がたくさん車道を走る。

歩道を歩く多くのビジネスマン。
映理、時間を気にしながら駆け足。

○同・カフェ前（朝）
店員の声「ありがとうございましたー」
映理が走ってくる。
ドアが開いて大和田が出てくる。
映理「わっ！」
大和田「えっ!?」
開いたドアに映理がぶつかり尻もちをつく。
ハンドバッグが転がりパスケースが飛び出る。
映理「いたた…」
大和田「ご、ごめんなさい。大丈夫ですか？」
大和田、映理に手を伸ばす。
映理「はい…ありがとうございます」
映理、大和田の手を取って立ち上がる。
大和田、パスケースを拾う。
大和田「ろく、どうさん？」

映理「りくどうって読むんです」
大和田「あ、そうなんだ。カッコいい名前だね。どうぞ」
映理、大和田からパスケースを受け取る。
大和田「急いでたようだけど平気？」
映理「あっ（時計を見て）ヤバイ！」
映理、会釈して走り出す。
大和田、映理を笑顔で見送る。

○株式会社ダイアホーム関東支部・全景
立派な社屋。
映理の声「よろしくお願いします！」

○同・オフィス
広々としたオフィス。
数人の社員が仕事をしている。
壁の成績表グラフ、大和田が首位。
窓際の席、寺島唯（41）と映理が向かい合っている。

寺島の手元、映理の履歴書がある。

寺島「六道映理さん、だね。部長の寺島です。これからよろしく」

映理「よろしくお願いします」

映理、深々と頭を下げる。

寺島「緊張しなくていいから。ウチは結果さえ出せばオッケー。仲良くやろうね」

映理「はい！よろしくお願いします！」

映理、９０度にお辞儀する。

寺島「じゃあ早速、君に参加してほしい業務があってね…」

○同・廊下

映理、書類の束を抱え、キョロキョロしながら歩いている。

扉のプレートを順に見ながら歩く。

映理「ミーティングルームＡ、Ｂ…」

Ｄのプレートを見つけてドアノブに手を伸ばす。

大和田の声「は？契約社員？」

映理の手が止まる。

大和田の声「どういうことですか、一人つけてくれるって、正社員かと思ってたのに」

映理、眉間に皺を寄せてドアに耳を付ける。

寺島の声「皆それぞれ自分の案件抱えてるからそうそう補助には回せないんだよ」

大和田の声「はぁ…だったらいない方がましじゃないですか？契約社員なんていたって邪魔なだけじゃ…」

○同・ミーティングルームD

映理、乱暴にドアを開けて怒鳴り込む。

映理「誰が邪魔ですか！」

話していた大和田と寺島、ギョッとした顔で振り返る。

映理、大股で大和田に詰め寄る。

映理「まだ会ってもいないうちから随分言いたい放題言ってくれるじゃないですか！契約社員だって使ってみてから文句言ってく

ださいよ！」

大和田「な、なんなんだお前いきなり出てきて無礼な…」

大和田、ハッとした顔で映理を見る。

映理も大和田を見つめハッとする。

映理「あなた、さっきの！」

大和田「お前、今朝の…！」

寺島、きょとんと大和田と映理を見る。

○同・オフィス

社員たちが忙しそうに働いている。

大和田、時折汗を拭いながら真剣な様子でＰＣを操作している。

映理、コップで麦茶を運んでくる。

映理「どうぞ」

大和田、麦茶を見て嫌な顔。

大和田「なんだこれ」

映理「麦茶ですけど。今日みたいな暑い日にピッタリ」

大和田「そんな味も素っ気もないもの飲める

か！」

大和田、コップを払いのける。

映理「あっ」

床に麦茶がこぼれる。

映理、慌てて拭く。

大和田「こういう時持ってくるのはコーヒーだろコーヒー！ホント使えねぇ。これだから契約社員は」

大和田、ブツブツ言いながらＰＣに向かう。

映理、大和田に見えないように舌を出す。

幸田「大丈夫？」

幸田康夫(30)、ティッシュ箱を持って一緒に拭き始める。

映理「すみません、ありがとうございます」

幸田「大変だね、あいつの下は」

映理「契約社員に親でも殺されたんですかね、あの人」

幸田「面白いこと言うね、君」

大和田、チラと見てすぐに視線を外す。

○同・オフィス（夕）

チラホラと帰社する社員が出てくる。

映理、ＰＣを閉じる。

大和田、図面の束を映理の机に置く。

大和田「六道、広告用の物件資料作ってくれ」

映理「すみません、それ急ぎでしょうか？私もう退社時間で」

大和田「昼までに完成でもいいんだが…残業くらいできるだろ。ちゃっちゃとやっちゃってくれよ」

映理「すみません、今日は家のことがあって残業はできないんです。お昼までなら、明日必ずやりますんで」

大和田、おおげさな溜息。

大和田「家のこと、家のこと。そういうのを言い訳にして、やるべき仕事を中途半端にしかできないから契約社員はダメなんだ」

映理「なんですかその言い草。契約社員は法

律で認められた立派な働き方ですよ」

大和田「中途半端が一番迷惑だって言ってるんだ」

映理「どっちも中途半端になんかしてません！家族と家計を支えるため両立させようとすることの何がいけないんですか！」

映理、資料を大和田に付き返す。

映理「本日の勤務時間終了です。どーしても今日中に作りたいというのなら、ご自分でやってください！」

映理、早足で帰っていく。

茫然と立ち尽くす大和田。

幸田「手伝おうか？大和田」

大和田と幸田、並んでＰＣで作業する。

大和田、イライラ。

大和田「なんなんだよ家族家族って。家のことしなきゃとか、だったら専業主婦になって余裕持ってやればいいだろ」

延々と愚痴を言っている大和田。

大和田「大体世の中が間違ってるんだ。女性

の社会進出がどうとか言う割には家庭的な女がいいとか矛盾してる。社会進出を後押しするなら家事は不要とか外注をお勧めするとかそういう方向に行くべきなんじゃないのか…。幸田、アンタはどう思う」

幸田「え？」

大和田「家庭的な女っての？家事をやる女」

幸田「そりゃ魅力的だと思うけどな。そういう子こそ、いい母親になるわけだし」

大和田「いい母親というか、なんでもやってくれるなんて甘やかしだ。小学生にでもなれば自分で何でもやるべきだ」

幸田「子供じゃ限度があるだろ。親の助けは必要だ」

大和田「自分でできなきゃ外注すればいいだけさ。俺はそうやって昔からなんでもやってきた」

幸田「寂しくないか」

大和田「そんな気持ち…忘れたな」

○同・オフィス（昼）

忙しく働いている社員たち。

チャイムが鳴る。

各々休憩に入る。

映理、自席で弁当を開く。

揚げ物やハンバーグ等、茶色が多い。

食べている映理の後ろを大和田が通りかかる。

大和田「茶色ばっかり。男子高校生か」

映理「その通り、男子高校生のために作った弁当の残りです」

大和田「見た目悪いな」

映理「味は美味しいんですよ？ほら」

映理、唐揚げを大和田に差し出す。

映理「あーん」

大和田、思わずあーんとしそうになって我に返り咳払い。

大和田「いらん！」

映理「美味しいのに」

映理、唐揚げを頬張る。

大和田、ふんと鼻を鳴らして去っていく。

大和田「幸田、駅前に食べに行こう」

幸田「あ、ああ」

大和田「しょーもない弁当じゃなくて栄養たっぷりのランチ食べようぜ」

映理、振り返って舌を出す。

大和田、ニヤッと笑って出ていく。

○同・オフィス（日替わり）

仕事風景。

大和田、携帯に電話がかかってきて受ける。

大和田「おはようございます、社長…」

机の電話が鳴る。

映理、電話を取る。

映理「はい、ダイアホーム・六道が承ります…はい、お世話になっております」

大和田「それでは失礼します（電話を切る）」

映理、大和田を見る。

映理「あ、はい。その件でしたら、…えぇ、少々お待ちくださいませ」

映理、電話を保留にする。

映理「大和田さん、１番に榊建設の田村さん」

大和田「あ、ありがと…」

大和田、映理に笑顔を向けかけてからハッとして目を逸らす。

大和田「ご苦労」

映理、ムカッとする。

大和田「（電話に出て）どうも田村課長！お待たせいたしました！先日の件でしょうか」

にこやかに話す大和田。

映理、大和田を見つめて頬を膨らませる。

映理「なーにが『ご苦労』よ」

大和田を睨みつけ、舌を出す映理。

視線に気づいた大和田、映理の顔に驚く。

電話が鳴り、すました顔で映理が出る。

映理「はい、ダイアホーム・六道が承ります…

はい、お世話になっております」

大和田、映理を睨みつける。

○同・会議室前

ドアに「使用中」の札がかかっている。

大和田の声「さっきのはなんだお前」

○同・会議室

大和田、資料の束を前に仁王立ち。

映理、資料を一部ずつ分けて製本作業。

大和田「俺が真面目に仕事の電話をしている時に邪魔するような真似して。これだから仕事に真剣さが足りない契約社員は嫌なんだ」

映理「わざわざ相手が私だからって態度変えるようなマネすることのどこが真面目なんですか？ほら、製本手伝ってくださいよ。あなたの希望でしょ？今どきアナログな資料作成」

映理、ホッチキスを差し出す。

大和田、目を逸らす。

大和田「単純な事務作業は女の方がうまいんだ」

映理「あー今度は女性蔑視！大和田さん、実は20くらい年齢サバ読んでません？価値観古すぎ。ていうか自分が不器用でできないことと性別絡めないでくれます？」

大和田「うるさいな君は！こんな契約社員は初めてだ！できないなんて言ってないだろう！俺は何をやらせてもうまいんだ！」

大和田、ホッチキスをひったくって資料の束を綴じ始める。

悪戦苦闘する大和田を見る映理、笑顔。

映理「そうそう。二人で頑張りましょうねー」

資料の表紙「駅前ランドマークマンション建設について・発案者　大和田誠・六道映理」

○同・会議室（夕）

資料の表紙に夕日が差し込んでいる。

各座席に製本された資料が並んでいる。
映理、満足げに見ている。
映理「完璧。（腕時計を見て）ちょうど間に合いましたね、大和田さん」
映理、隣の大和田を振り返る。
大和田、机に突っ伏している。
映理「大和田さん？」
大和田、ハッとして顔を上げる。
大和田「な、なんだ？ちょっと寝てた…」
映理「これから大事な会議って言う時に緊張感ないですねぇ。真剣さが足りないのってどっちでしたっけ」
大和田「ちょっと昨日寝不足だっただけだ」
大和田、起き上がるが足元がふらつく。
映理、慌てて支える。
映理「何やってんですか。大丈夫ですか？プレゼン代わりましょうか」
大和田「触るな、契約社員」
大和田、映理の手をどかす。
大和田「トイレ行ってくる」

大和田、出ていく。

映理「まー可愛くない。そんな調子でプレゼンなんてできるんですかねー」

ドアが閉まる。

映理、ドアを見つめる。

×　×　×

大和田の声「お手元の資料を開いてください」

会議室に重役が複数人並んで資料を開いている。

大和田、マイクを持って登壇している。

映理、脇に立ち資料を見ている。

大和田の声「なごみ駅周辺は再開発計画が進んでいて…」

マイクを通す大和田の少し苦しそうな声。

映理、大和田を見る。

大和田、演台に手を突いて話している。

大和田の首筋に汗が大量に浮かんでいる。

映理、大和田に駆け寄ろうとする。

大和田、話しながら映理を手で制止する。

映理、立ち止まる。

大和田、背筋を伸ばして話を続ける。

大和田「今後都心部へのアクセスが改善されることから、なごみ駅周辺がベッドタウンとして機能することが可能となります。そこで…」

映理、大和田をジッと見つめる。

○同・企画部（夜）

映理と大和田が入ってくる。

映理、電気を点ける。

手を突いてうつむく大和田に近付く。

映理「お疲れさまでした、完璧だったと思います。でも…大丈夫ですか？」

大和田「（間を置いて）うん？」

映理を振り返る大和田、真っ青。

映理「え、真っ青じゃないですか…」

大和田、意識を失い映理に倒れこむ。

映理、慌てて受け止める。

映理「お、大和田さん！大和田さん!?」

大和田、目を閉じている。

○医務室（夜）

ベッドに横になる大和田。

映理、電話しながら大和田の額に冷却シートを貼る。

映理「うん、だからちょっと帰り遅くなるかも…ご飯先に食べちゃってもいいから。ごめんね。姉ちゃんいなくてもちゃんと宿題すんのよ。…うん、じゃあね」

大和田、映理の手首を掴む。

映理「（電話を切って）大和田さん？気が付きました？」

大和田、目を閉じたままうなされている。

大和田「かあ、さん…行かないで…」

映理、目を丸くする。

大和田「いやだ、一人は嫌だ…いい子にする

から。全部言うこと聞くから頑張るから…」

大和田、涙を流しながらうなされている。

映理、大和田の手を取って握り締める。

反対の手で大和田の頭を撫でる。

映理「大丈夫、大丈夫、一人じゃないからね」

大和田、声をあげて泣いている。

映理、繰り返し声をかける。

枕元の大和田の携帯を手に取り立ち上がる。

×　×　×

静かに眠っている大和田。

ゆっくりを目を開けて周囲を見回す。

映理の声「だから！そういう考えがおかしいって言ってるんです！」

大和田、顔を上げる。

ドアの向こう、窓越しに映理の背中が見える。

○医務室前（夜）

映理が大和田の電話で話している。
映理の大声が廊下に響いている。
映理「わかります？一番苦しい時に真っ先に出た言葉が『行かないで』ですよ⁉どんだけ息子に寂しい思いさせてんですかあなたは！確かに誠さんは優秀ですけどねぇ、あなたの教育が悪いせいで寂しがり屋のくせに人にマウント取ることしかできない人間に育っちゃってんですよ！それで一番弱った時に大声で泣かなきゃならないんです！わかります？大の大人が『行かないで』って泣くカッコ悪さ！誰の責任ですかこれ！」

○医務室（夜）
大和田、ベッドから半身を起こして映理を見ている。
大和田「六道…」
映理の声「もういいです！あなたみたいのが毒親っていうんですね！よーくわかりました！勉強になりました！ありがとうござい

ました！さよなら！」

乱暴にドアが開き映理が入ってくる。

大和田、ポカンと映理を見る。

映理「（携帯を枕元に戻しつつ）具合、ちょっとは良くなりました？」

大和田「あ、ああ」

映理「そうですか、よかった」

映理、冷蔵庫に向かい中から麦茶のペットボトルを取り出す。

映理、無言でコップに麦茶を注ぐ。

大和田「あの、六道…」

映理「大和田さん」

映理、麦茶の入ったコップを大和田に差し出す。

映理「私、決めました。私があなたに家族っていうものを教えてあげます」

大和田、映理を見上げる。

映理、大和田を見つめ返す。

大和田「それってプロポーズか？」

映理「えっ」

大和田、コップを受け取る。
麦茶を呷ってニヤリとする大和田。
映理「いや、私はまだそんなつもりじゃ…」
大和田「ま、今はそれでいいや」

○大和田家・ダイニング（朝）
パジャマ姿の誠が立っている。
机の上、麦茶が置いてある。
誠、手に取る。

○六道家・ダイニング（夜）
志郎、宿題をしている。
理人、ゲームをしている。
理人「姉ちゃんまだかなー」
志郎「そろそろじゃね」
ドアが開く音が聞こえる。
映理の声「ただいまー。あ、じゃあどうぞ上がってください」
映理が入ってくる。
映理「理人！宿題ちゃんとやったんでしょう

ね！」

理人「やったよ」

志郎「嘘つけずっとゲームやってたじゃん」

大和田が入ってくる。

大和田「…お邪魔します」

志郎・理人「（困惑しつつ）いらっしゃいませ」

映理「そこ座って待っててくださいね」

映理、キッチンに立つ。

大和田、席に着く。

志郎と理人、大和田を見る。

大和田「…どうも初めまして」

志郎・理人「はじめまして」

志郎「えっと」

大和田「あ、えっと俺…私は彼女の」

理人「姉ちゃんの彼氏!?」

映理、鍋を流しに落としてしまう。

映理「ち、違うの！姉ちゃんの先輩！上司！ちょっと色々あって家で夕飯をふるまうことになっただけ！」

理人「えー色々ってなんだよ」
映理「色々は色々。あんたはさっさと宿題やんなさい！」
理人「はぁい」
理人、部屋を出ていく。
映理、料理を始める。
大和田と志郎、気まずい沈黙。
志郎「あ、えっとお茶出します！」
大和田「あ、ああお構いなく…」
志郎、冷蔵庫から麦茶を出して大和田に出す。
志郎「どうぞ！」
大和田「ありがとう」
大和田、コップを受け取る。
志郎「あの。姉ちゃん、ちゃんと仕事やってますか」
大和田「え？まぁ…それなりには」
志郎「姉ちゃん、ホントは教師になりたかったんです。子供好きだから。でも、母ちゃんが死んで、母ちゃんの代わりやらなきゃ

いけなくなって、免許取るの諦めたんです。
突然だったからマトモな就活もできなくて」
大和田「…そうか」
志郎「今考えたら、そんなことしないでもい
くらでも方法あった気がするんですけどね」
映理「（料理しながら）志郎ー？大和田さん
に変なこと吹き込んでないでしょうね？」
志郎「なんにも！（小声で）あんな姉ちゃん
ですけど、よろしくお願いします」
大和田、苦笑。
理人、国語の教科書と音読カードを持
ってくる。
席に着くと大声で読み始める。
理人「おおきなかぶ！おじいさんが、かぶの
たねをまきましたー！」
志郎「うるせーよ」
理人「（もっと大きく）あまいあまい、かぶ
になれー！」
志郎「うるせーって！」
映理、両手に料理を持ち運んでくる。

映理「元気があっていいぞ理人ー！でもご近所迷惑も考えてね」

理人「大きな声のトコ、二重丸にしてよ」

映理「もちろん。花丸にするよ」

理人「あまいあまい、かぶになれ！大きな大きなかぶになれ」

映理「うんとこどっこいしょ！」

理人「まだそこじゃない！」

映理「あはは、早すぎたかー」

映理、配膳しながら

映理「今日は私の得意料理なんで。家庭の味、とくと味わってくださいね」

肉じゃが、野菜炒め、冷奴、みそ汁、ご飯と並べていく。

大きく切られたじゃがいもが皿から転がり落ちる。

志郎「あーもう何やってんだよ姉ちゃん」

志郎、じゃがいもを拾って自分の皿に乗せテーブルを布巾で拭く。

志郎「いくらなんでも盛りすぎ」

映理「あはは、ごめん」
志郎「まったく…」
大和田、映理たちを見ながら麦茶を飲む。

○六道家・玄関（夜）
大和田、靴を履き土間に立つ。
大和田「今日は世話になったな」
見送りに出ている映理・志郎・理人。
映理「明日は休みます？」
大和田「いや、出るよ。残務処理がある」
不安げな表情の映理。
大和田「そんな顔するな。もうすっかり元気だから。お前らのおかげでな」
映理「えっ」
理人「大和田の兄ちゃん、明日また来てね」
志郎「こら。（大和田に）いつでもいいんでまた来てください」
大和田「ありがとう。それじゃ」
大和田、ドアを開ける。

映理「気を付けて」

大和田、志郎と理人に手を振りながら出ていく。

見送る映理。

大和田、立ち止まる。

大和田「ああそれと。今日のこと忘れてくれ」

映理「え」

大和田「いいな！忘れろよ！」

大和田、大股で去っていく。

○株式会社ダイアホーム・オフィス

慌ただしい社内。

大和田、ＰＣに向かい真剣に打ち込んでいる。

映理、ホットコーヒーを運んでくる。

大和田、無言で受け取る。

大和田「この間の物件情報の資料は」

映理「できてます。それと榊建設の田村さんから電話がありました。昨日のプレゼンについて詳しくききたいって」

遠くから様子を見ている幸田、夕子(26)、朝子(28)。

大和田「わかった。ありがとう。資料は机に置いといて」

映理「はい」

大和田、鞄を持って出ていく。

映理、カップを持って給湯室へ向かう。

○同・給湯室

カップを洗う映理。

夕子「ちょっと六道さん！どういうこと？」

映理「何がですか？」

朝子「大和田さんよ！アンタたち昨日までごかったじゃない？」

夕子「熱は…ないわね。あるのは大和田さんの方？」

映理「いえいえ、あったのは昨日の方で」

夕子・朝子「なに？」

映理「こっちの話です～。ご心配おかけしましたけど、今はもう大丈夫ってことで。そ

れじゃ」

映理、鼻歌を歌いながら出ていく。

夕子「宇宙人にでも乗っ取られたかしら」

○同・駐車場

社用車が並んでいる。

電話をかけながら大和田が歩いてくる。

大和田「うん…まぁ用ってほどじゃないんだけど。うん。昨日の電話、ごめん。それだけ言いたくて。え？ああ、具合はもう大丈夫。ただの寝不足だから。いや、彼女はそんなんじゃなくてただの契約社員で」

大和田、車に乗り込む。

大和田「ああ…そうする。母さん。俺、別に恨んだりしてないから。それだけ。じゃあ」

大和田、電話を切って携帯を見つめる。

走り出す車。

○同・オフィス

映理、パソコンで仕事をしている。

大和田、パソコンを操作しながら電話で話している。
大和田、映理に指示を出す。
映理、うなずいて席を立つ。
壁の成績表、大和田の件数がかなり増えている。
寺島、笑顔で社内を見ている。

○六道家・キッチン（夜）
映理と大和田が並んで立っている。
大和田、おぼつかない手で、包丁でじゃがいもの皮を向いている。
映理「ダメダメ、そこに指あったら切っちゃいますよ！」
大和田「じゃあどこもって剥けばいいんだ」
映理「あーもう見てらんない。（ピーラー渡して）これ使ってください！」
大和田「え、なんだよこんな便利なものあるなら最初に出せよ」
映理「最初から便利なものに頼ってたら成長

しませんよ。難しくても不便でも最初は基本から」

大和田「お前意外とそういうとこ古風だよな。体育会系っつーか」

映理「余裕あるときはちゃんとした手順で覚えていった方がいいんですよ。その方が上手い手の抜き方もわかってくるし」

大和田「そんなもんかね」

映理「私なんかはいきなり家事全部担当だったんで、とにかく効率よく回すことを最優先で考えてやってましたけどね」

大和田「じゃあお前も包丁でやってないのかよ」

映理「余裕出てきてからちゃんと勉強してます〜残念でした」

大和田「あーそうですか」

映理「それ剥き終わったら切ってくださいね。カレーの時は煮込みすぎて消えちゃわないように大きめに」

大和田「大きめ…こんなもんか」

映理「半分じゃでかすぎますよ！」
大和田「大きめって言ったじゃないか」
映理「限度ってもんがありますって！はーもう、大和田さん、仕事以外は大概ポンコツですね」
大和田「うるさい、契約社員」
映理「それ今関係ないでしょー！都合悪くなるとすぐそれ言う！」

○同・廊下
志郎、キッチンをそっと覗いている。
理人「兄ちゃん、お腹空いた」
志郎「（シーッ！）もうちょっと待ってような（スナックを理人に渡しつつ）」
志郎と理人、奥の部屋へ戻っていく。
理人「姉ちゃん楽しそうだね」
志郎「そうだな」

○株式会社ダイアホーム・オフィス
寺島の席の前に大和田が立っている。

寺島、笑顔。

大和田、真剣な顔で寺島を見る。

寺島「まだ内示だから、くれぐれも秘密な」

大和田「はい。ありがとうございます」

大和田、深く頭を下げる。

寺島「いやいや、全部君の頑張りだから。向こうに行ってもよろしくね」

大和田「はい」

大和田、足取り軽く席に戻る。

映理「何かあったんですか？」

大和田「（咳払い）なんでもない」

映理「そうですか」

大和田「…六道」

映理「はい？」

大和田「（咳払い）今夜飲みに行かないか」

映理「はい!?」

大和田「嫌ならいい！ちょっと言ってみただけだから！気にすんな！」

映理「嫌じゃないですよ、ただちょっと驚いただけです」

大和田「あー…でもダメか。志郎くんたちがいるしな」
映理「平気ですよ。今日はお父さんが夜勤明けで家にいますし」
大和田「そうか」
映理「じゃあ飲みに行きますか。上司なんですから奢りですよね？」
大和田「薄給だ、バカ」
大和田と映理、和やかに会話している。
遠くから朝子、夕子、幸田が見ている。
朝子「なんなの、あの別世界」
夕子「ホントに別人じゃないのかしら、大和田さん」
幸田、深いため息。

○居酒屋「鉄仮面」（夜）
入口の引き戸から煌々と明かりが漏れている。
客が入店する。
店員の声「いらっしゃいませー」

○同・店内（夜）

映理と大和田がカウンターに並んでいる。

映理、ビールジョッキを掲げる。

映理「はい、かんぱーい」

大和田「ああ」

ビールジョッキをぶつける。

映理「でも急にどうしたんですか？大和田さんから誘ってくれたのって初めてですよね。ウチには来てくれるけど呼ばれたことないですし」

大和田「ちょっとな」

映理「何かいいことありました？」

大和田「内緒だ」

映理「あーいいことあったな。ご機嫌だから飲みに行きたかったんでしょ。そうですね」

大和田、黙って飲む。

映理「それならそれでもいいんですけど、そこで誘うのが私っていうところが寂しいで

すねぇ。こういう時、普通は仲の良い友達と一緒にお祝いするもんじゃないですか？」

大和田、睨む。

映理「あ、すみません。お友達いませんでした？まぁそれっぽいですけど」

大和田「うるせぇよ」

映理「まぁそんなに落ち込まないでください よ～私ならいくらでもお付き合いしてあげますから！ね！」

大和田「お前は俺に家族を教えてくれるんだろ」

映理「え？」

大和田「なんでもない。すみませーん、たこわさ一つ！」

映理「あ、たこわさ二つで！」

○駅前（夜）

真っ赤な顔の映理と大和田が入ってくる。

ホームに電車が入ってくるのが見える。

映理「あ、行かないと」

大和田「急げよ」

映理「はい。それじゃ失礼します」

映理、会釈して走っていく。

大和田、それを見送って踵を返す。

壁際のマガジンラックに目をやる。

賃貸情報が書かれたチラシが何種類も置いてある。

一冊を手に取り去っていく。

○大和田家・リビング（夜）

大和田、酒を飲みながらチラシをめくりＰＣを操作する。

賃貸情報サイトを開いている。

北海道の情報ページ。

一人用マンションのページを開き戻る。

ファミリー用マンションの項目にカーソルを合わせる。

大和田、悩んだ挙句クリック。

大和田「いや、いくらなんでも」

元のページに戻る。
大和田、酒を一気飲みする。
スマホを手に取り考え込む。

○株式会社ダイアホーム・オフィス
映理と大和田、それぞれ仕事をしている。
大和田、パソコンを閉じると出かける用意を始める。
映理「あれ、おでかけですか」
大和田「ああ。高畠さんの家で打ち合わせだ。今日はその後早退するから後はよろしく」
映理「珍しいですね。どこか具合悪い？」
大和田「そう見えるか？」
映理「すこぶる快調そうです」
大和田「個人的な用事だ。母親との、な」
映理、表情を強張らせる。
大和田「ご心配なく。和やかな会食予定だよ」
大和田、笑顔で出ていく。
映理、見送る。

映理「あのお母さんと和やかな会食…想像できないな」

○同・エントランス

大和田、鼻歌を歌いながら会社を出ていく。

○高畠家前（夕）

立派な一軒家。

大和田の声「本日はどうもありがとうございました」

○同・玄関（夕）

広々とした玄関。

靴を履いた大和田、立ち上がる。

高畠(67)と洋子(64)、笑顔で立っている。

洋子「お夕食一緒に食べていったらいいのに」

大和田「有難いお話ですが、今日はこれから会食の予定なので…。また次の機会にぜひ」

洋子「まぁ、残念」

高畠「接待というやつかな。君も相変わらず忙しくしているね」

大和田「いえ、今日の予定は母との食事ですので」

洋子「あら、お母様と！いいわねぇ、うちなんかもう何年も一緒に食べていないわ」

大和田「はは、ウチも数年ぶりですよ…正直、緊張しています」

高畠「いいことだ。楽しんできなさい」

大和田「ありがとうございます」

高畠「図面が出来上がるのを楽しみにしているよ」

大和田「お任せください。最速で仕上げまして、すぐにご連絡いたしますね」

洋子「頼もしいわ」

大和田「恐縮です。それでは、失礼いたします」

洋子「お母様によろしくねー！」

大和田、一礼して出ていく。

洋子「大和田さん、ちょっと雰囲気変わったんじゃない？」

高畠「お前もそう思うか」

洋子「あんなによく笑う子だったかしらね」

高畠「よっぽど楽しみなんだろう」

高畠と洋子、笑顔で笑いあう。

○同・前（夕）

大和田が出てくる。

スマホを取り出して電話をかけながら歩き始める。

大和田「もしもし。ああ、今終わった。もうそっちに行ける…ああ、じゃあそこに行くから。うん。…また後で」

大和田、深い息を吐きながら切る。

○松乃屋児童公園（夕）

閑散とした、あまり広くない公園。

大和田、ブランコに乗りながらスマホを見ている。

公園の外を時々車が通っていく。
スマホのアルバムを見る。
映理や志郎、理人と一緒に撮った写真がたくさんある。
スクロール、一番最後に大和田が一人で写っている動画データがある。
メール画面を開き、動画を添付する。
映理の名前を選択する。
母から電話がかかってくる。
大和田「もしもし？うん、もう着いてる。ああ」
ミカの声「ココアーココア、どこー？」
久我ミカ(7)、公園の外を歩いている。
大和田、ミカを見る。
大和田「いいよ、のんびり待ってるから。ここ久しぶりに来たけど変わってないね」
公園の周りをウロウロしているミカ。
大和田、しゃべりながらミカを見ている。
車が通っていく。

ミカ「ココアー戻ってきてー！」
ミカ、周囲を見回している。

○同・前
ミカ、ウロウロと探している。
ミカ「ココアー」
犬の声がする。
ミカ、振り返る。
ココア（犬）が歩いている。

○同・内
大和田、電話で話している。
トラックが走ってくるのが見える。
大和田、トラックを目で追う。
ミカの頭が見える。

○同・前
ミカ「ココア！」
ミカ、笑顔で走る。
トラックが走ってくる。

○同・内

大和田、ハッとしてスマホを放り投げ

公園の外へ走る。

トラックの激しいブレーキ音。

○六道家・キッチン（夜）

映理が料理をしている。

鍋に食材を入れて火にかける。

キッチンタイマーを操作する。

ダイニングでスマホにメールが届く。

映理、スマホに駆け寄る。

映理「大和田さんからだ」

動画が添付されている。

動画を再生する。

○大和田の部屋（動画）

殺風景な部屋の中心に大和田が座っている。

大和田「えーと。見えていますか、六道さん。

大和田です。どうもこんにちは。おはよう？こんばんは？まぁいいか。（咳払い）えー、なんでこんな動画を撮っているかというと、あなたに話したいことがあったからです」

真剣な表情でカメラを見る大和田。

○六道家・キッチン

映理、見ながら椅子に腰掛ける。

○大和田の部屋（動画）

大和田「最初の頃は面倒な女だと思ってた。契約社員のくせに色々口出してくるうるさい奴だって。でも、いざ一緒に働いてみると、すごくやりやすかった。俺の成績が上がったのも、あなたのフォローがあったからだと思ってる。本気で」

○六道家・キッチン

映理「えー何この動画、大和田さん気持ち悪いんだけど～」

○大和田の部屋（動画）

大和田「仕事のことだけじゃなく、家族を教えてくれたのも大きかった。理人くんや志郎くんと過ごして、歳は離れてるけど兄弟ってこんなもんか、とか。親ってこんなに大変なのか、とか色々学ばせてもらった。あなたのおかげで、俺は人間的に成長できた気がする。ありがとう」

大和田、頭を下げる。

顔を上げ居住まいを正す。

大和田「えー、そんなわけで。実は先日、来季の異動について内示があった。俺、北海道の函館支社の支社長に抜擢されたんだ」

○六道家・キッチン

映理「え、すごい。支社長って」

大和田の声「つきましては」

○大和田の部屋（動画）

大和田、真剣な表情。

大和田「六道映理さん。俺と一緒に北海道へ来てほしい。俺はあなたと本当の家族になりたい」

○六道家・キッチン

映理、驚いてスマホを取り落とす。

大和田の声「こんなこと、直接会って話せよと思うかもしれないけど」

○大和田の部屋（動画）

大和田、照れくさそうな笑顔。

大和田「直接だと素直に言えそうにないから、先にこうやって伝えておくことにした。ちょっとずるいかもしれないが、ある意味俺らしいだろ」

○六道家・キッチン

映理、震える手でスマホを取る。

大和田の声「とりあえず、明日の仕事中はま

ず普通の態度で頼む。どっちの答えでも仕事に影響ででてしまうからな」

映理、零れる涙を拭いながら笑顔でスマホを見つめる。

映理「ほんと…らしいって言うか…」

大和田の声「それと、最後に」

大和田のスマホから着信が来る。

映理、すまして電話を受ける。

映理「…もしもし…え、あの、どちら様で…。え、大和田さんのお母さん？急にどうして」

映理、表情が強張る。

スマホの向こうから女性の泣きじゃくる声と救急車のサイレンの音が聞こえる。

〇松乃屋児童公園・前（夜）

救急車とパトカーが来ている。

トラックが停まっている。

野次馬の人だかり。

ミカ、ココアを抱いて、母親に泣きつ

いている。

スマホを耳に当てたまま座り込み、泣きじゃくる女性の後姿。

救急隊員が救命活動を行っている。

大和田の声「あなたに出会えて本当に良かった」

隙間から血だらけの手が見える。

了

２００字詰原稿用紙換算・１０８枚